

---

# 髪

雪村星依子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
髪

【コード】  
N2683P

【作者名】  
雪村星依子

【あらすじ】  
「俺」は入院中に後輩の死を知る。後輩の上村は怪異に怯えていた。

上村が死んだ。その報せを、俺は病院で聞いた。

「上村が東京湾で車ごと沈んでいたんだと。事故と殺人の可能性があるからお前の処にも警察が行くかもしれん。まあ、入院中にすまんが、彼奴あいつとはお前が特に親しかったしな。何か知っていることがあれば教えてやれ」

上司からの電話を俺は上の空で聞いた。

事故と殺人　どちらにも当て嵌まるのだろうし、恐らく終局的に説明はつかない筈はずだ。俺は確信している。

彼奴は「誰か」に殺されたんじゃない。

だが、警察は証拠もない俺の言葉を信じまい。他殺を匂わせる状況だったことは事故と他殺両面から調べると言う警察の捜査方針から窺うかがえるが、それは警察　、否、この世の物差しで測れる犯行ではないのだ。だが、そう訴えたところで誰が信じるであろう。訴えるだけ無駄である。いや、悪く運べば己が疑われる可能性だってある。

上村は俺より一年後に入社した後輩で、ごくごく普通のサラリーマンだ。誰に対しても友好的で従順な奴であった。趣味はツーリングで、連休にはよく誘われた。不幸にも俺はその途上で転倒骨折して入院することになったが、上村は誘った手前罪悪感があるのか、それにしても熱心に毎週末見舞に来て、仕事やプライベートやらの近況を報告してくれた。仕事ではハマも多く、その都度尻ぬぐいをさせられたが、向上心もあって同じ失敗は繰り返さない。教え甲斐があり、奴のために苦労するのも悪くはないと思っていた。

いい後輩だった。本当にいい奴だった。

上村の様子がおかしいと気が付いたのは入院生活五週目の頃だ。上村は何かに怯えていた。妙にそわそわして落ち着かない。真夏で暑かろうに長袖シャツを捲りもしない。問うと鳥肌が立って治まらないと言う。やがて面会もはじめの頃より減って、代わりに頻繁に電話をくれたがいつも息を潜めるような話し方だった。久々に面会に訪れた上村を、俺は追求した。どうした、何を怖がっている、と。哀れな捨て犬のように頼りない眼で俺を見て、上村は答えた。

「髪が、髪の毛が俺を殺そうとしているんです」

はじめ、俺の思考は理解に届かなかった。上村曰く、はじめは髪の毛が皮膚の上にあつて痒い、というところから気付いたと言う。しかしその箇所には髪はなく、衣服を具に調べても毛髪はない。だから何かアレルギーでも発症したのかと思つたそうだ。

しかしそれは誤解だった。

「大人になつてからアレルギーが発症することもあるかと思つて病院にかかりました。でも検査して貰つても何も異常がなくなつて。精神的な思い込みかとも……。でも、そうじゃなかつたんです」

就寝中、まるで体の長い虫が足元から這い上がるような感触を得ぞつとした上村は布団を捲つたそうだ。すると足首から膝のあたりにかけて螺旋を描いて纏わり付いていたのだ。黒く、長い毛の束が。

上村はそれを俺に見せてくれた。艶々と傷みのない髪は女のもののように思えた。

「手の込んだ悪戯だな」

俺は笑つて見せたが上村は裏切られたような目をして、且つ訴える。

「俺が入院中の先輩にこんな笑えないジョークを仕掛けると思いますか？ 此奴は俺の足をナメクジみたいに這つてきた。絡みついて、

締め付けようという力さえあつたんですよ」

上村はズボンの裾すそを上げた。そこに残る締め付けの痕あと。もう一週間も消えないと聞き、最早俺の表情からも血の気は引いていた。

俺は上村を見た。そこにあるのは戦慄せんりつの表情。

事実なのだ。上村は事実を話したのだ。

だがそれは発端に過ぎなかった。「髪」の障さわりは日に日に増し、怯おびえる上村の様子が尋常じんじょうではなくなっていった。どうにかしてやりたかったが俺には対策も浮かばなかった。どこに相談したらよいものか判断に困った。ネットを駆使して救いの道を探すも、やがて上村からの連絡が途絶えた。此方こなたから何度も連絡をしたが、もう一週間ほど音沙汰がない。

そこへ今日の報せだ。俺は自身の無力に絶望しかけた。

果たして刑事はやってきた。俺は自分から問うのは不審ふしんがられると思い、刑事からその言葉が出るのを待った。

「髪」が、あつたのだろうか？

刑事は上村の様子を細かに聞いてきたが、なかなか「髪」について切り出さない。俺は痺しびれを切らし、

「上村は塞ふさいでいたし自殺をする予感よかんはあつた。しかしそれが単なる事故ではないと考えるのは何故なにゆえです？」と問うた。

刑事はとうとう答えた。

「上村さんの首に長い髪の毛が絡みついていましたんですよ」

上村の死因は水死ではなく、絞殺しごである可能性が高いと言う。

「彼が女性関係で揉めていたとかいう話は聞きませんか？」

刑事も、あれが女の髪だと判断したか。

「聞きませんね」

揉めていたとしても、それは過去の話だろう。今付き合っている彼女が居るとか、そういう浮ついた噂は無かつたし、俺も聞いていない。

それに。

「髪」はいつも上村が一人の時に現れ、誰かが細工した様子もなかったのだ。故に上村は誰にも相談できず、自分でも説明がつけられずに怯えるしかなかったのだ。

「髪」は上村を殺そうと迫り、上村は逃げるように車を走らせた。だが「髪」は車中にも湧いて上村を絞め殺したのだ。

およそ生者の所業ではない。

暫くして、髪が誰のものか判明した。刑事が報せてくれた。

「信じ難いことですが、髪は上村さんの部屋の元住人のものでした。女性でね……自殺したという話です。上村さんが入居する際は伏せられていたそうですが」

入居の前に清掃業者を入れるはずだが、上村の部屋から一本だけ、彼のものではない毛髪が残っており、調べたところ上村の死体に巻き付いていた髪のDNAと一致することが判明したという。上村は俺の入院中引越しをしており、今の部屋に入居した時期と様子がおかしくなった時期が重なる。

「上村さんとその女には何の接点も無いことが調べて明らかになっています。しかし女が死んだのは一年前だ。大家も毛髪一本くらいなら見逃しても、毛束なぞは押入や床下収納からだつて見つからなかった、と言っています。まったくもって不可解ですが、これ以上の不審点は出てきそうにもありませんし、ご遺族の希望もあって事故死として処理するつもりです。いやはや、ご迷惑をお掛けしましたな」

刑事はそう言って去っていった。

こうなることは判っていたが、上村は浮かばれぬだろう。

死せる女の呪い。

どういふ素性の女であれ、自殺するほどの絶望を抱えていたこと

は確かだ。上村はその哀しき魂に連れ去られてしまったのだ。逃げる上村をどこまでも追いかける執念は、そのまま孤独の深さを物語る。同じ部屋に住み合わせたという繋がりにもみ執着して。

上村よ、唯々ただただついていなかった。俺は天を仰いで奴を悼いたんだ。

(後書き)

ツイッターで書いたお題小説の追記編集版です。

お題は「後輩」「サラリーマン」「東京湾」

あんまり怖くない……かも。期待はずれでしたら御免なさい。

ご意見ご感想があれば、お気軽にお寄せいただけると嬉しいです。

メール：info@urandometria.mond.jp

WEB拍手：<http://clap.webclap.com/clap.php?id=ginkembunko> (1000文字まで投稿可)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2683p/>

---

髪

2011年3月14日22時10分発行